

# 薬草だより

## 橋本竹二郎の植物画紹介

### その10

樋口 剛央\*

トウキ (セリ科)

*Angelica acutiloba* (Umbelliferae)

生薬名：当帰 (トウキ)

花期は8～10月。多数の白色の小花からなる直径20cm程の複散形花序を頂生する。トウキは薬用植物として日本各地で栽培されてきた多年生草本である。根を薬用部位とする。通例、湯通ししたものが用いられる。株高40～90cmで、茎は紫色を帯びており、全草に独特な甘い芳香がある。いわゆる「漢方の匂い」とされるもので、漢方薬と云えばこの香りが思い浮かぶという人も多い。日本薬局方「当帰」において、トウキの他に基原植物とされるホッカイトウキ *A. acutiloba* var. *sugiyamae* はトウキの変異種、トウキとエゾノヨロイグサ *A. anomala* との自然交配種など来歴には諸説ある。トウキよりやや大型で、主根は長く太い。多くの茎は緑色であり、開花期が遅いといった違いがある。古くから婦人の要薬として用いられ、血流改善、鎮痛、抗炎症作用などが報告されている。当帰芍薬散、加味逍遙散、芍婦調血飲、温経湯、温清飲、折衝飲、女神散などの婦人薬を中心に数多くの処方に配合される。



ドクダミ (ドクダミ科)

*Houttuynia cordata* (Saururaceae)

生薬名：十薬 (ジュウヤク)

花期は6～7月。多数の黄色の小花からなる長さ1～3cmの穂状花序を頂生し、下部に白色の花びらのような萼を4枚付けるので、全体でひとつの花のように見える。花期の地上部を薬用部位とする。日本では各地の低地に自生し、台湾、中国、ヒマラヤ、ジャワ地方にかけて広く分布する多年生草本で、やや湿った半陰地に良く育ち、高さ30～40cm程になる。全株に特異な臭いがあることから、

ぎょせいそう

魚腥草 (腥：生臭い) の別名がある。古くから様々な症状に効く民間薬として、乾燥させた全草を煎じて排尿障害、便秘、高血圧などにお茶代わりに飲用したり、できもの、湿疹、水虫、痔などには生の葉を揉んだり、火に炙って患部に貼り付けて外用した。また、日本薬局方にも十薬の名で収載されている。日本においてドクダミの名や効能を説いた最も古い記録は、徳川家康が息子である將軍秀忠の正室、江に宛てた訓戒状 (1612年) とされる書状であり、その中に「煎じて用いれば良い薬である」旨が記されている。また、十薬の名は中国での古名「戟 (しゅう)」に由来するとされるが諸説あり、そのひとつとして、貝原益軒が『大和本草』 (1709年) に記した「十種ノ薬ノ能アリトテ十薬ト号スト云 (十種の薬の効能があるので十薬という)」がある。現在でも民間薬として単味で使用されることが多く、処方では栝楼薤白湯、五物解毒散に配合される。



橋本竹二郎

元松浦薬業株式会社顧問

来歴

1931年東京に生まれる。

牧野富太郎氏らと親交。津村研究所 (現ツムラ)、名城大学薬学部、富山大学和漢薬研究所のほか、複数の製薬会社の顧問等を歴任。

2018年9月27日逝去。

主な著書

「立山路の花しるべ」 (共著、巧玄出版, 1977)、  
「北陸の自然誌」 (里見信生 編著, 巧玄出版, 1979)、  
「目で見える薬草百科-見分け方・採取時期・薬効と使い方」 (永岡書店, 1984)、  
「薬草・花を描く-ハーブドローイング植物画を楽しもう」 (日貿出版社, 1994) ほか